

# 夢窓幼稚園通信第11号

2023年 5月 31日

枕草子第一段の「春はあけぼの・・・」は、誰もが知っている 春夏  
秋冬の趣きを、潔いまでに、すっきり語る一文ですが、虫が見ら  
れるこの季節になると 毎年浮かんで来て、口をついて出てきます。  
その夏のシーン

夏は夜、月のころはさらなり、やみもなほ、ほたるの  
多く飛びちがひたる。また、たゞ一ツ二ツなどほのかに  
うち光りて行くもをかし、雨など降るもをかし。

古典文学では、「夢い」などとして虫が使われることが多い  
気がしますが、夏の風景としてそのまま取り上げてみて、今の  
時代の感覚で読めるところが 独特です。

思い返すと、はじめて虫を目にしたのは 5-6歳の頃。虫狩りに  
行った方から 確かいたいただいたのでしょう。虫かごにはいた 数匹  
の ほたる でした。

寝る時は「部屋の中では可哀想」と外の物干しに掛けておいた  
ところ、残念ながら 虫かごと 朝には無くなっていて、まさしく  
「はかない想い」をした はじめての ほたる 体験でした。  
大きくなり 信州の源氏ボタルの群生地での感動、京都に住むよう  
になると 高尾や清滝まで行かなくても、散歩の田んぼ道でも、近くの  
有栖川や御室川でも、日常的に見られるのが「うれしい夏の風物です。

今年は どんな虫と出会えるのでしょうか。飛び方・光り方で ほたる  
それぞれに名前をつけるのも 面白そうです。

雨の季節がやってきます。

夏の雨の夜もいと、清少納言も言うように、私たちも雨の季節を  
静かに存分に 楽しむ心を持って 過ごしたいものです。

いにしえ人と今の私たちと、1000年の時を超えて 感じ合える  
ひとつひとつの季節感。友人として 清少納言や 兼好法師と  
うなずき合えるのですから 愉快です。

未来1200年後の人々と、私たちは 四季を…風物を…もののあはれを  
共感し合えるのでしょうか？

目に見える生活様式や働き方が変化するとしても、通奏低音として  
流れている 感性は 共有し合っていたいものです。

1200年後も 地球が 美しく存在していますように！

園長 升光 泰雄